

満州馬賊王小日向白朗の戦後史 (1900.01.31~1982.01.05)

大正時代から昭和にかけて中国大陸へ渡り、馬賊の親分になって満州の荒野を駆け巡っていた男に、小日向白朗氏がいる。中国名は『尚旭東』とか『小白竜』とも呼ばれていたが、『馬賊戦記』(朽木寒三著番町書房刊)をお読みになってご存知の方も多かろう。当時は1911年に『辛亥革命』が起こって、翌12年中華民国が成立、孫文がイギリスより帰国して臨時大統領に就任し、近代化を目指したが、袁世凱が清朝以来保有した軍事力を背景に孫文らの革命派を駆逐して、初代大統領に就任、さらには自ら帝位に着くなど、混乱に拍車をかけた。その後、革命や内乱が相次ぎ、軍閥があちこちに台頭。日・英・仏など列強が内政を干渉、国内は4分5裂の状態となり、日本軍と組んだ張作霖は満州を制圧して北京にまで進出した。しかしその後蒋介石が国民党を組織して北伐を開始すると、28年張作霖は奉天へ逃げ帰ろうとしたが、日本軍により奉天郊外で爆殺された。この事実を知った息子の張学良は、日本軍に見切りをつけ国民党に寝返り、1931年には『満州事変』へと突き進む。これが小日向氏が大陸へ渡った頃の時代背景である。

小日向氏が馬賊の親分へのし上がってゆく道程は、決して平坦なものではなかった。しかし彼には他人の心を捉える才能があった。そして他人が真似ることの出来ない豪胆さがあった。さらには金銭に固執しないおおらかさもあった。そしてもう一つあげれば若さがあったことだろうか。しかしそれにも増して彼は、何よりも強運の持ち主だったということができよう。朝鮮半島を徒歩で満州に入って、彼は日本軍の大佐、坂西利八郎のところに転がり込んだ。坂西は間もなく少将になり、北京に異動、後に貴族院議員となって活躍したのだが、小日向も坂西について北京へ行き、かれこれ2年間北京に滞在し、ここで北京語と拳銃を学び、多くの知己を得た。この中には、『敵中横断三百里』の主人公となった建川美次を初め、板垣征四郎、土肥原賢治など後に大陸に名を馳せたツワモノ達があった。

そしてしばらくして西方へ向かうチャンスがやってきて、坂西の計らいで、軍事探偵を名目に、内蒙古へ行くことになったのである。小日向は最終的にはヨーロッパを目指していたから、西方への転出は願ってもないチャンス到来であった。しかし北京を離れてしばらくすると、たちまち馬賊の捕虜となり、手足を縛られて、馬小屋にぶち込まれた。そしてしばらくの捕虜生活の後、明日は戦闘だという日、白朗は馬1頭とモーゼルの拳銃が渡された。そして翌日の晩、いよいよ敵陣へ突撃。白朗は人梯子を身軽によじ登って敵の城壁を越えて城内へ侵入、中から城門を開けることに成功したのである。これにより見方軍は、たちまち城内に突入して大勝利を収めることが出来た。そして白朗は全くの無傷でこの勝利に貢献したことにより、仲間から福子(神の子)とみなされ、自分より年上の部下を数名持つ小隊長へと昇格したのである。以降白朗の馬賊

としての生活は、幸運も重なって昇進を続け、知名度も上がってゆくことになるのである。

そんな彼の馬賊生活の中で、特筆すべきことは、国際的にも名声を高めることとなった事件である。18歳になる英国人の少女が、營口(現遼寧省、遼東半島西北部にある都市)のゴルフ場で、馬賊の人質として拉致されてしまったのである。これは国際問題にも発展したが、これを小日向氏が馬賊から解放して、無血で解決した事件であった。当初この英国人少女を捕らえた馬賊はこの少女が金になりそうだと分かってくると、この金目当てに盗賊や匪賊、こそ泥など2,000人に膨れ上がり、父親のフィリップ院長に金百萬元、歩兵銃1万丁、軽機関銃500丁及びその弾薬など、途方もない要求となっていた。この少女は父親が大きな病院の経営者であり、英国人貴族の婚約者でもあったことから、英国でも重大ニュースとして伝えられていたのである。当時、満州はほぼ日本の支配下にあったところから、国際的にも日本軍の関与や、責任等が追及されており、特に松岡洋右外相が国際連盟の会議で、ジュネーブに行くまでのあいだに、この少女を解放することが緊急の課題になっていた。しかも英王室の機関紙であった『メリー・テレグラフ』にいたっては1万ポンドの賞金まで出すという事件に発展していたのである。そして白朗はこの難題に対していくつかの条件をつけて応じることとなった。その第一は日本軍の司令部が直接関与して統制をとること、第二はメリー・テレグラム社の賞金を断ること、第三は世界中のあらゆるマスコミ関係者はこの記事に関して、事件解決までいっさいの報道を行わないことなどであった。そして白朗は犯人が大安県の山賊『北霸天(ベパテン)』という男であることを突き止めて、老人2人と少年1人のみを引き連れて敵陣へ乗り込み、持ち前の度胸と馬賊の心の裏を読み取って、見事に戦闘を交えることもなく、山賊北霸天を自分の子分にして、この英国人少女を救出することに成功するのである。そして満州国政府から10萬元、英国居留民団から2萬元を受け取るとこれを、すべて北霸天に渡して自分からリペート等をとることはなかった。小日向白朗はまだ30歳頃の大手柄だったのである。

しかしここに到るまでに白朗にもいくつかの失敗はあった。最初の失敗は天山北方での敗北だった。味方100騎に対して敵200騎の不利な状況のもと、敵を侮って戦に挑んだのである。この数年後、当時を振り返って白朗は、「戦うだけが馬賊ではない。むしろ威を示し、策を用い、戦わずして敵をしりぞけるのが本道だった。はっきり言って、鉄砲だって撃つのは殺すためじゃない。相手をおどかすためのものじゃないか。」(『馬賊戦記』朽木寒三著番町書房刊)と語っているのである。実はこのときまで小日向にとっては、敵味方双方が高台に陣取って対峙する、蒙古のいわゆる馬賊流集団決闘の経験がなかったのである。そして先に記した英国人少女誘拐事件では、見事にその教訓を生かして銃を撃つこともなく、また流血することもなく少女を解放することに成功したわけである。

また白朗は1度だけ憲兵に捕まったことがあった。建平県城の藻堂での出来事である。彼は45日ほどここの牢屋に入れられて、首と手は木で出来た手枷(カケ)、首枷に繋がれ、

足には足枷がはめられたのである。この足枷には鉄の重石がつけられていて、トイレには大小あわせて1日に1回しか行かせてもらえない。そしてしばらくして牛車に乗せられると、城内を引き回されて、刑場へと向かったのであった。列の先頭には会子手(ホイズヨ)が作法にのっとり歩いて刑場に入る。そこには穴が掘られており、青竜刀で切り落とされた首と死刑囚の身体は、この穴に落とされる仕組みになっている。白朗もそこに座らされて死刑執行立会人が来るのを待った。ところが群集のドヨメキが起こるとやがて銃声がとどろき、数騎の騎馬武者が刑場になだれ込むと、一人の男が、ものすごい力で小日向を馬上に掴み上げて、走り去ったのである。そしてこの男こそ、かつて白朗がその祖父を烏丹(ウタン)の公営府の牢から救った「来春峰」と名乗る若者だったのである。満州馬賊の『任侠の志』は極めて篤い。白朗もまたこの任侠の道に生き、来春峰もまた同じ道を生きてきたのである。

さて小日向白朗は日本軍と満州馬賊が戦って一般市民までが犠牲になっていることを深く憂えて、馬賊の武装解除と、日本軍の馬賊征圧をやめるよう双方の間を駆け回り、大半の馬賊は帰農するか、華北に入って一般の市民となり、日本軍の支配下に置かれるようになった。そして日本は清朝最後の皇帝『溥儀(フギ)』を担ぎ出して1932年『満州国』を建国、1933年1月には熱河に侵入、同年3月リットン調査団の張作霖爆殺報告に対抗して、国際連盟を脱退することになるのである。

しかし日本軍が統治したのは、満州鉄道沿線の主要都市と、周辺の点と線のみで、これを守るために一般民をも巻き込んだ横暴や戦闘はしばしば発生、民心はすっかり日本から離反し、満州国は国民なき政府となって行った。この点では中国政府がいう『過去の歴史認識』も、ムベなるかなと言わざるを得ないのだが、かと言って八路軍が正義でなかった記録も数多く残されている。そして1925年3月、孫文が死去すると、蒋介石の国民党軍、毛沢東の共産党軍、さらには日本軍と、中国は無政府状態に陥った。そして日本軍の退潮と共に、農民や貧民層の心を掴んだ共産党軍が破竹の勢いで勢力を拡大、日本が第二次世界大戦に敗北すると間もなく、蒋介石一派は台湾へ逃れ、アジアは新しい時代へと歩み始めるのである。

1941年(昭和16年)小日向氏は中国人女性張猛声(チョウモウセイ)と2度目の結婚をするが、もう40代になっていた。やがて長男小日向明朗が誕生する。しかし幸せは長くは続かなかった。というのもその後小日向氏はしばらく国民党軍の捕虜となったからである。しかし張猛声の努力もあって何とか解放され、日本人であることにより日本への帰国命令が出されたためにやむなく、家族と離別して、かつての部下に助けられ台湾へ脱出、その後、何とか帰国することができたが、もう50歳に差しかかっていた。

ところで小日向白朗といっても御存知ない方が大半かと思われる。今では伝説上の人物ではあるが、先にも記したように中国では『尚旭東』とか『小白竜』と呼ばれており、一時は南満州馬賊の大半を率いていたほどの男であった。そして第二次世界大戦

後の世界歴史の裏側で暗躍した男でもある。1970年代の米中国交回復、日中国交回復の際、中華人民共和国との橋渡しをした人物とされ、当時のアメリカでニクソン大統領の特別補佐官に就任し、絶大な発言権と行動力を持っていたキッシンジャー(Henry Alfred Kissinger 1926.05.27~)氏のところへ、六本木の星条旗通りにある米軍基地から厚木の米軍基地にヘリで飛び、パスポートも持たずに渡米した男でもあった。

1971年7月、キッシンジャー氏は小日向白朗氏の仲介もあって、極秘裏にパキスタンで行方をくらませて中華人民共和国にわたり、米中国交回復へ向けての話し合いが行われた。また同年10月、2度目の訪中を果たし、キッシンジャー氏は周恩来首相とも直接会談し米中の和解、そしてベトナム戦争の終結への道筋を作った。72年2月にはニクソン大統領も訪中を果たしているものの、台湾問題等二つの中国の解決に手間取り、国交回復はカーター政権になってからで1979年4月のことだった。こうした世界歴史の大舞台を裏で支えたのが小日向氏といわれ、満州放浪時代に周恩来首相とも毛沢東主席とも、勿論蒋介石とも相まみえたことがあると語っており、当時、関東軍憲兵隊司令官として赴任してきた東條英機少将(すぐに中将へ昇格)からは特に珍重され、毎日のように昼食に招待され、東條は小日向の中国や満州に対する見解に耳を傾けたという。

ところで小日向氏は米中国交回復や、日中の国交回復のみに尽力したわけではない。1970年秋、彼はライシャワー氏に招待されて、ボストン郊外に在住していた氏の自邸を訪問した。ライシャワー氏は4年ほど前に駐日大使を退官して、この地で静かに余生を過ごしていたのである。小日向氏は日本とアメリカの現状と将来をライシャワー氏ととことん議論し、ライシャワー氏の意見に耳を傾けた上で、アメリカ政府に対して『沖縄の返還問題』、そして新潟及び静岡両県を含む、関東圏全域にわたる『首都圏航空管制権の問題』、さらにはVoice of America(VOA)の問題に関しても鋭い矛先を向けている。この三つの問題に関しては、彼の関心は多大だったようで、VOAに関してはこの電波を利用して、アメリカに向けられて発射された『大陸間弾道ミサイル』が、日本上空で打ち落とすために利用されることを、強く懸念していたようである。一方沖縄問題は1971年6月に一応の解決は見られたものの、いまだに『日米地位協定』という不平等条約は改められておらず、沖縄の苦悩は戦後70年を経た今日も続いている。米軍基地内に、いわば治外法権が認められているのは世界でも日本だけで、同じように敗戦国であるドイツ、イタリーでは、米軍がその国の基地を、間借りする形になっている。しかしこれとても米国との間で、熾烈な外交交渉の結果得られた対等関係で、日本政府のようなペコペコ外交では、到底得られないものだった。

さらに岸内閣時代、本土の米軍基地周辺では、米兵によるさまざまな暴行事件や窃盗事件が起きて、特に岐阜や山口では周辺住民とのあいだで、激しい基地排斥運動が起こった。このとき岸内閣は本土内の多くの基地を、当時はまだ米国管理下にあった沖縄に移設することで米政府と妥協した。しかしこのとき小日向は、『岸は沖縄が将来

日本に返還されることを、まるで放棄している。』と言って大いに怒っていた。現在の沖縄基地問題は、この岸政権の沖縄を見捨てて、未来への展望を欠いた失政から生まれたといっても過言ではない。そうしてその孫の安倍晋三が、また新たな失政を繰り返そうとしている。日本の政治や外交には全く自主性も国家意識もなく、アメリカの言いなりになっているところが、なんとも嘆かわしい。沖縄戦終戦70年を記念した式典で、翁長知事は沖縄の基地を少しでも減らすよう政府に強く迫った。しかし安倍総理は官僚が作ったと思われる、さしさわりのない基地の縮小に努力する旨の談話を読み上げた。このとき会場から「安倍帰れ！」のヤジが起こった。沖縄の過去100年の歴史を考えると、そしてとりわけこの70年の悲惨な沖縄の歴史を振り返れば、このヤジに軍配が上がる。テレビ画面に現れたヤジを発した男性はもう80歳を過ぎた老人だった。『岸の孫が無責任に何を言うか！』との思いが、ひととき強かったのだろう。しかしマスコミはこの問題を大きく取り上げることはなかった。安倍がもし真に沖縄の基地問題に取り組むなら、沖縄基地の一つを自分の選挙区内に移転することぐらい、考えるべきだと筆者は思う。口先だけで言ってることは明白であり、戦争体験すらない安倍晋三の言うことは、まさにすべてが机上の空論としか思えない。

アメリカではケネディ大統領は第二次大戦下、海軍の魚雷艇に乗り日本艦船と衝突して、命からがら無人島に漂着する辛酸を舐めている。同じくイギリスのチャーチル首相も、第二次大戦末期、ノルマンジー上陸作戦に際して、イギリス国王ジョージ6世(現エリザベス国王の父)が、『俺もノルマンジーへ行ってドイツと戦う』と言ったので、チャーチルは、『では私も一緒にしよう』と言ったが、『首相がイギリスを指導しないでどうする。首相はこの国に残って全軍を指揮しなければならない。』と主張し、結局この話はなくなったという逸話もある。現にジョージ6世は第1次世界大戦に従軍しており、ユトランド沖海戦で砲塔担当の士官として活躍したことが記録に残っている。そして第2次大戦中は、ドイツ軍の激しい空爆下、バッキンガム宮殿に在住し、宮殿内にも爆弾は投下されている。このときまだ王妃だった現在のエリザベス国王が「爆撃された事に感謝しましょう。これでイーストエンドに顔向け出来ます。」と言った言葉は今も語り継がれており、国民と同じく配給物資の制限を受け、暖房のない部屋で暮らしていたことも、米国大統領ルーズベルト夫人の手記からも明らかにされている。現在のイギリス皇太子チャールズの息子のヘンリー王子も、アフガニスタンのタリバン掃討のために、前線勤務についていた。イギリスの男子王族は軍務に着くことが義務付けられており、戦争があれば当然前線にも行くことになっている。だが安倍晋三は絶対にインド洋にもフォルムズ海峡に行くことはないし、日本の皇室も同様である。まず日本国民の生命の危機が生じたとき、自衛隊だけが命を欠けて戦わなければならないというのは、憲法の元での国民の平等にも反する気さえしてくるのである。筆者は、日本と欧米諸国とのこの落差の中で、日本の政治家は、あまりにも

真の防衛について軽んじているようにしか思えないのである。

そればかりか首都圏の航空管制権については、全く話題にもならず、米軍機は事前の届出もなく、首都圏の上空を我が物顔に飛行して、日本の民間機の航路を侵略し、演習や飛行する自由が認められている。今から45年近く前の話になるが、1971年7月30日、自衛隊機と全日空機が雫石の上空で接触し両機とも墜落。自衛隊機パイロットは脱出したものの、全日空機の乗客・乗員合わせて162名が犠牲になったことがあった。これは通常の事故として扱われ最高裁まで争われたが、一説によれば、自衛隊機が全日空機を敵機とみなして、演習した結果だとも言われていた。こういう事件がいつの日か、日米の間で起こりかねない状態が、野放しにされているのである。安部内閣は、自衛隊の海外での武器使用等に関する法律を制定してアメリカのご機嫌をとる前に、まず同じ敗戦国であるドイツ、イタリア並みの日米対等の地位協定に改善することと、この首都圏の航空管制権を日本の支配下に戻すことを、まずもって先行すべきだろう。この課題のほうが沖縄基地問題よりもはるかにたやすいことのように思える。そして次に日米地位協定を平等のものとし、さらに基地移転問題に及ぶべきではないだろうか。

さて1972年9月田中角栄の政権下、角栄は岸・佐藤ラインの台湾ルートに見切りをつけて、いわばアメリカの頭越しに日中国交回復を断行した。しかしキッシンジャー氏はこれを大いに怒り、後にロッキード事件へと発展した『ピーナッツ情報』を小日向氏に手渡したと言われている。小日向氏はこれを文芸春秋社、もしくは立花隆氏に渡し、立花氏は1974年、文芸春秋に『田中角栄研究～その金脈と人脈』を発表。田中政権は間もなく崩壊することとなった。この間の事情について文芸春秋社及び立花氏は、そろそろこの入手経路を明かしてもよいのではなかろうか。マスコミ界では情報の入手経路は明かさないことが不文律とされているが、このような歴史に関わる大事件に関しては、政府の外交文書等も、30年を目途に公開されるように、30年なりを目途に公開されてもよいのではないかと、筆者は考えている。実は筆者は小日向氏に銀座の喫茶店でお目にかかったことがある。『馬賊戦記』にあるように、その太い声とは裏腹に意外に小柄な人物だった。

さて小日向氏は田中内閣に再三中国やアジアの若い青少年を日本の国費で招請して、日本で教育、母国へ返すことを提案したが、田中角栄は列島改造に熱中するあまり、小日向氏の申出に耳を傾けることはなかった。これに業を煮やした小日向氏は田中内閣と決別、ロッキード事件が明るみに出ることになったのである。しかし田中内閣時代に小日向氏の提案が実行されていたら、日本の歴史も大いに変わっていただろう。戦後の小日向氏は日本に居ながらも多くの華僑から絶大な信頼を集めていた。将介石が息子の将経国と不仲であることを知ると、晩年を日本で過ごすことを提案、1970年代、アジアの華僑と共に中伊豆に広大な敷地を用意して、その準備を進めたが1975年に将介石が没し、果たすことは出来なかった。小日向氏にしてみれば、日中、米中の国交回復は、台湾政府の否定でもあり、ある意味で将介石に対する裏切りでもあった。これに

対する謝罪の意味もあったのかも知れない。そして小日向自身も1982年1月、小平市に妻を残して82歳で没した。筆者は小日向氏の芳子夫人と、その後しばらく賀状の交換を行っていたが間もなく途絶えた。ご高齢になられて、賀状を出すことが苦痛になられたものかと思い、筆者の方からも連絡することをやめてしまった。しかし小日向氏逝去の数年後に、他界されたことを後で知った。

【筆者注1】

筆者の父は旧制水戸高校の出身である。全寮制だった当時、寮の仲間には先輩の赤城宗徳氏の他にも、同期の水田三喜男氏、塚原俊郎氏、丹羽橋四郎氏、宇都宮徳馬氏、また大先輩には三井不動産の江戸英雄氏、後輩には官房長官を務めた後藤田正晴氏などがおり、第3次佐藤栄作内閣時代には、赤城農林大臣・水田大蔵大臣・塚原労働大臣・丹羽運輸大臣の4閣僚が名を連ねていた。このためマスコミからは、さながら『水戸内閣』と言われたほどだった。そして第1次中曽根内閣時代にはカミソリとまで言われた後藤田官房長官が誕生したのである。

宇都宮氏は大臣にはならなかったものの、ミノファーゲンという製薬会社の社長を務め、独自の政治理念のもと、自らの道を歩み続け、日中国交回復の推進には、大きな役割を果たした個性あふれた政治家でもあった。実は日中国交回復に積極的な発言を繰り返していた赤城宗徳氏や宇都宮徳馬氏を小日向氏に紹介したのは筆者の父であった。

前置きはさておき小日向氏と父との出会いは古く、小日向氏が九州大牟田から東京へ戻ってきた頃で、長野県知事を辞めて、国会議員として兵庫県から選出された富田健治氏の紹介によるものだった。父は富田氏が主催する研究会に属しており、小日向氏は富田氏とは古くから交流があり、また特に富田氏が理事長になった合気道や日本の武道とその精神を昂揚しようとの目的で設立された『財団法人合気会』に小日向氏も加わり、こんな縁から富田氏に紹介されたのだった。これが契機で父と小日向氏はやがて一緒に日中国交回復へ向けた準備を進めるようになっていったのである。二人は『アジアは一つ』を合言葉に、大いに意気投合して殆ど毎日、会うようになったらしい。筆者は毎日かかってくる小日向氏からの電話を、父に取り次いだ記憶がある。それにCIAから、電話がかかってきたこともあって驚いた。

また小日向氏がパスポートも持たずにアメリカに渡ることが決まると、父に逐一、アメリカとのコミュニケーションの進展状況を語り、よき参謀として相談に乗っていたらしい。そして何よりもこの渡米の中に畏が潜んでいないか、小日向氏は当初は半信半疑だったらしい。小日向氏は大陸でさまざまな戦闘や駆け引きを体験した感性から、ひょっとして嵌められるんじゃないかという一抹の不安を抱いていたようで、小日向氏は父に、もしものときのことを託して渡米したようだった。しかしパスポートを持たなかったのには理由があった。小日向氏の出入国記録により、極秘裏に進められてきた、米中の国交回復が、何かの折に日本政府に漏れることを、恐れたからでもあったらしい。というのは当時の日本政府は、台湾との関係を重視する岸信介・佐藤栄作ラインで、アメリカ政府内でも台湾問題に関する議論がまだ煮詰まっていなかった時代、この情報が

日本政府から台湾政府に事前に漏れるのを、極端に恐れていたらしい。

その後のキッシンジャー氏との会話や、大陸と台湾の2つの中国問題、ベトナム戦争終結後のアジア全体の問題。ドル切り下げ時のニクソンショック等は、父は明言することはなかったが、小日向氏から逐一報告を受けていたようで、ベトナム戦争は今年中には終わるとか、ドルの切り下げに関しても1ヶ月ほど前から報告を受けていたらしく、父も近々アメリカから経済の大ニュースが発表されると、当時まだカケダシだった筆者にもポツポツと語っていた。

田中内閣による日中国交回復に関する一件は、田中内閣の官房長官を務めた二階堂進氏と何回か会合を持っていたようで、田中角栄氏の秘書官だった榎本敏夫氏からの電話はしばしばあった。(榎本夫人の証言は『ハチの一刺し』として騒がれた。)しかし何処かでボタンの賭け違いがあって、日本がアメリカに先んじて日中国交回復を成し遂げることになったのだろう。またロッキード事件による田中内閣の崩壊、ピーナッツメモを文芸春秋に渡した件等も、小日向氏は父に語っており、筆者もその概要に関しては聞いていた。しかしこのメモを立花隆氏に渡したのか、文芸春秋社に渡したかに関しては、はっきりとした記憶がないが、確か立花氏だったと思う。

またアジアの華僑と共に、蒋介石を日本に招いて、中伊豆町で暮らしていただくための別荘作りに関しても、5万分の1の地図を何枚も張り合わせて、かなり大規模な計画を進めているようだった。この地図を見せられたことは筆者もはっきりと記憶している。筆者も現在70歳を過ぎて先は長くない。そんな事情から歴史の証人として、ここに記しておくことにしたわけである。

[筆者注2]

小日向氏の戦記物語を記した書籍は多いものの、彼の個人的な私生活に関しては殆ど知られていない。彼は人生で3度結婚しており、最初の結婚は1936年(昭和11年)で、小日向白朗36歳のときだった。北海道出身の女性といわれているが、その出自は定かではない。次の結婚は1941年(昭和16年)で、お相手は中国人女性張猛声(チョウモウセイ)だった。彼女との間に一男、明朗(めいろう)をもうけたが、その後第二次大戦の終戦と蒋介石軍の捕虜、台湾への密航、そして帰国する間に、家族は離ればなれとなり、小日向は帰国後、九州大牟田の運送会社に職を得た。そしてトラックの運転手として生活し、そこの社長の妹で10歳年下の、杉森芳子と結婚生活に入る。しかし入籍することなく、間もなく1955年(昭和30年)に東京へ上京、新宿区百人町でのアパート暮らしが始った。その後ここを事務所として、都下小平市で生活することになったらしい。1960年(昭和35年)頃になると、池田内閣から右翼対策のため協力しないかとの声がかかるようになり、生活も安定して来たようだ。そして昭和43年小日向が68歳のとき、妻芳子を入籍している。大陸に残して来た二番目の妻猛声との決別を、小日向自身が決意したということだろうか。そして14年後、1982年(昭和57年)芳子に看取られて世を去ったのである。戒名は「大雄院釋白道居士」であった。

白朗の死後16年が経った1998年(平成10年)『尚旭東生誕98年忌墓前祭』が、高尾山山麓の墓前で行われた。既に妻芳子も世になく、しかし幸せだったことに二番目の妻だった猛省が、

この式典に中国から参列することができた。というよりも猛声の所在が関係者によって、明らかにされたために行われた式典だったというべきだろう。猛声も既に 80 歳になっていた。ここに猛声がこの式典に捧げた『唯以忘却的人生百味』と題された祭文があるので記しておきたい。

尚旭東先生、あなたと上海で結婚したのは 1940 年 11 月のことでしたね。なした男の子に明朗という名をつけてくださいましたね。

思いかえせば 1945 年の終戦直後、あなたは無錫(ムシヤク=上海と南京の間地点の都市名)のわたしの実家に隠棲し、日中は農夫たちと農作業に精を出し、夜はランプを灯して明朗に教え、ときには近所の人たちと、膝を交えて語りあい、すっかり地元にとけこんでいました。

ですが、それもほんのつかの間のこと。あなたは戦犯容疑で国民党政府の憲兵に連行され、南京の監獄に拘留されました。ひとりになってしまったわたしは、微々たる力をふりしぼり、勇気を奮い起こし、前に向かって進むしかありませんでした。

それから二年のあいだ、伝手をたよっての日々、北京や上海をめぐり、ただただ尚旭東救出のために奔走したのです。そして、ああ、ついに何応欽(カオウキン=国民党)将軍の助けにすがるのがかない、裁判所に親筆の書簡を送っていただけなのです。なんという幸運でしたでしょう。そのお陰もあって、あなたは無罪放免となり、無錫の田舎へ戻ったあなたとまたいっしょに暮らすことができました。とても幸せな日々でした。明朗のためにも、そんな境遇がずっとつづくことを願っていました。でも、その幸せのなんと短いことだったでしょうか。49 年の晩秋、あなたは追われて単身中国を去っていきました。

金銭に執着しないあなたは私財を蓄えることを潔しとせず、信義と道義を重んじ、除暴安良を旨とする日々のなか、交友関係は中国全土におよび、あらゆる階層の人たちと接触をもち、ただ自身の信念のためだけに行動するという生き方を貫かれたように思います。

あなたは、まさに中国大陸を駆け抜けていかれたのです。思えば、わが家にはまったく蓄えというものがありませんでした。1948 年にあなたが戻ってきたとき、わたしはすぐに女工を辞めて故郷に帰り、実家の家族と一緒に暮らしました。わたしは、村々の小学校をまわって子供たちを教えるほんのわずかばかりの給金しかなく、やっとの思いで生活を維持しました。ほんとうに精一杯の毎日でしたね。でも、あなたはいつも笑いを振りまいてくれました。その心優しさに、どんなにか感謝したことでしょう。

あなたが中国大陸を去った 1950 年、わたしは西南鉄道局の小学校教師に応募し、試験に合格すると湖南衡陽鉄道第一小学校に配属され、その後すぐに広西省柳川鉄道小学校に転勤となりました。幼い明朗を連れ、数千里も離れた異郷で生きていかねばならなかったのです。一人とて知り合いもなく、切なさや愚痴に耳をかしてくれる相手さえいない暮らしがわたしを待っていました。それでも胸を張り、上を向き、ひたすら教学に励み、明朗を健康に立派に成人させることだけに専念しました。

そんな暮らしのわたしたちに、また悲劇が襲ってきました。解放後の政策が激変し、政治

闘争が苛烈になっていくにつれ、尚旭東の大陸での活動の性質が特殊で複雑だったことや、わたしたちが「異民族結婚」ということもあって、攻撃の矛先は日々激しく、ついに離婚するよう迫られました。しかも、明朗まで巻き添えにされてしまったのです。1959年、国内有数の大学である清華大学に合格したものの、政治審査に引っかかり、やむなく進学を諦め、世間を放浪するほかなくなってしまうました。

やがて「文化大革命」という政治の嵐が中国全土で巻き起こりました。わたしと明朗が受けた苦しみは、まるで鉄板の上で焼かれるようにますます酷烈となり、明朗はとうとう8ヶ月間も投獄されてしまいました。わたしもまた学校を追放され、工場で厳しい労働に従事させられるようになりました。物質的にも精神的にも耐え難い、こんな地獄のような日々が10年もつづいたのです。もし、明朗の母に対する優しい思いやりがなかったら、もし前途にかすかな希望がなかったら、わたしはとっくに自分の人生にけりをつけていたことでしょう。明朗とて、もしわたしがいなかったら、こんなに強く成長することはなかったでしょう。

長く過酷な風雪のあと、新たな社会主義が訪れようとしていました。世の中を正しい姿に戻してくれたのは鄧小平先生でした。わたしたちは特別感謝しなければならないでしょう。なぜなら白が黒、黒が白とされる善悪逆転の、まさに崩壊に瀕していた国家民族を、林彪と4人組の魔の手から救い出してくれたのですから。

1979年7月、わたしの名誉は回復されました。ふたたび学校へ戻ることができました。そして1985年4月退職するまで教鞭を執りつづけることができました。明朗は早くから政治的迫害を受け、思うように職を得ることができず、その収入たるや微々たるものでした。何とか援助したいと思っても、心はやれど力及ばず、退職金とて数えるほどで、心はただただ痛むばかりだったのです。

尚旭東先生と生前親しくしてくださった方々が、明朗を力強く支援し、助けてくださったので、いま孫たちの未来にはたしかなものがあります。わたしは、この皆さんのご恩に感謝しても感謝しつくせない気持ちでいっぱいです。わたしは今日、幸運にも来日でき、あなたの墓前祭に参加することができました。あなたとこうして再び会えるとは、望外の喜びというしかありません。いま、わたしは涙にくれながらも来し方を報告しております。これがわたしの生涯最大の願いだったのです。流すまいと思っても、涙がとめどなく頬を濡らします。

つらく長かったわたしの人生も、間もなく幕をおろすでしょう。そんないま、心から望むのは、子や孫たちが一生懸命努力し、小日向家を代々しっかりと盛り上げて反映させ、日中両国民の友好に貢献してもらいたいということです。

けっして忘れ去ることのできない人生も、もう過去のものとなりました。いまは前途に光明を感じ、この上もない喜びと安らぎを感じています。泉下のあなたも、きっと微笑んでくださっていることでしょうね。

張猛声

猛声は2010年まで生きて、92歳で世を去った。【原文を谷端翔氏が翻訳（）内は筆者記入】
 どんな戦争も利益をもたらすことはない。勝っても負けても、悲しみと苦しみが残る。そして
 戦後の混乱は孫の代まで及ぶ。我々はこのことを決して忘れてはならないのだろう。

[筆者注3]

小日向氏は生前「自分はオオカミの毛皮1枚あれば、満州のマイナス30度を超える寒さにも耐えることができる」と豪語していた。中国大陸を縦横無尽に駆け巡った小日向にとって、ヤンピーの毛皮も、カシミアのコートも似合わなかつただろう。必要なものは金銭や、財産よりも、自分の命を守るための拳銃であり、移動するための馬だけだつた。だから猛声が言うように全く蓄えがなかつたというのは嘘ではないし、日本へ帰って来てからの小日向も、決して金銭を要求することはなかつたようだ。田中内閣時代、彼は日中国交回復に多大な貢献をした。しかし田中内閣が彼に支払つた対価は全くなかつたように見える。唯一榎本秘書官が気を使って、日比谷にあった中華料理店「新橋亭」での食事や打ち合わせの費用と、連絡のための電話代を支払わなくても済む様に、取り計らってくれた程度だつたと、筆者は聞いている。

一方、彼は小平にアパートを一棟所有しており、そこからの家賃収入が唯一の安定収入だつた。しかしこれとても彼の所有物ではなかつたらしい。彼の支援者であつた華僑たちが、彼の生活を見て便宜を図つたもので、彼と妻の芳子が亡くなると、これは元の持ち主の元へ返還されたらしい。従つて息子である小日向明朗へ贈与されるべきものも、皆無に等しかつたのである。小日向が唯一あふれるほどに所有していたものは、「仁義」と「人情」であつたことを最後に記して、人間小日向白朗の波乱に満ちた昭和史に関する話を終了させていただきたい。

[筆者注4]

正直言つて筆者は、小日向氏存命中は、どこか胡散臭い男のように見えた。年金生活者だつた父は手弁当で、終生、小日向氏と行動を共にしていた。しかし筆者の目には小日向氏の掌上で、やれアジアは一つだの、世界平和だのといつて踊らされているように見えたのである。しかしいくつかの書籍を読み、彼の人となりを知るに及んで、父も小日向氏同様に、人生を世界平和のために捧げたのだらうと思えるようになった。父は国立国会図書館専門調査員という職務を最後に、現役の公職を去つた。そして生前、政府からの叙勲を断つた。ところが父の亡時にはNHKからの取材の申し込みがあつた。しかし国立国会図書館の方でこれを断つた。国立国会図書館の副館長が亡くなられた時には、NHKからの取材申し込みがなかつたからというのが、その理由であつたとのことだつた。NHKからの取材は、父が生前に行つた日中国交回復への貢献などが評価されたものだつたと聞いている。にもかかわらず国立国会図書館の対応は、いかにもお役所的判断であり、嘆かわしい。政治が大きく躍動するとき、そこには大政治家も、市井の無名人も祖国のために動く。父もその1人だつた。最後にこの項を記す気持ちになつたのも、そのことを留めるためであつたことを明記しておきたい。